

# 崎門学報

創刊号

平成 26 年 10 月 1 日

崎門学研究会



## 目次

- 一面 学報発行の趣旨
- 二面 坪内隆彦氏講演要旨
- 三面 栗林潜鋒『保建大記』を読む
- 四面 九月活動報告
- 五面 崎門列伝①

## 学報発行の趣旨

いまなぜ崎門学なのか

崎門学は江戸時代中期の儒者、山崎闇斎が始めた学問です。その特徴は飽くまで皇室中心主義の立場から朱子学的大義名分論によって「君臣の分」と「内外の別」を厳格に正す点にありました。君臣の分は、天皇が主

君で国民は臣下であるという序列、内外の別は内国と外国の思想や人種の区別を明確にするということです。それは必然的に、内においては徳川の専政、外においては外敵の来寇

という内憂外患を乗り越えるための尊皇攘夷思想に行き着き、明治維新の思想的端緒にもなりました。なかでも闇斎の高弟である浅見綱斎などは「終身足関東の地を踏まず」として御所のまします京都で尊王斥霸の教えを説き、その弟子である若林強斎もまた御所の近くに「望楠軒」という私塾を構えて弟子たちに尊王思想を鼓吹したのでした。幕末志士の重鎮である梅田雲浜などはこの望楠軒の出身であり、また望楠学派ではありませんが、越前の橋本左内や長州の吉田松陰、薩摩の有馬新七なども崎門の学統に連なります。望楠学

派を始め、崎門学は主として在野において育まれ、だからこそ時の権力への阿諛追従を一切許さぬ厳格な行動倫理を保ちえたのです

が、一方で、三宅観瀾や鶴飼錬斎、栗山潜鋒といった闇斎門下が水戸光圀の求めに応じて『大日本史』の編纂に参画したことによって、その思想は幕末の水戸学、つまりは徳川体制の内側にも深甚な影響を与えました。

では、以上のような性格を有する崎門学を現代の日本に生きる我々が学ぶ意義はどこにあるのでしょうか。

そもそも天孫邇邇雲命が天照大神のご神勅によって地上の世界である葦原中国に降臨し、そのご子孫である神武天皇が我が国を建国されて以来、我が国は万世一系の天皇が君臨し、国民と父子同然の君臣関係を育んで来ました。無論、その過程では、蘇我氏や藤原氏、源平以降の六百年以上に渡る武家政権など、時の権力が天皇と国民との間に介在し、国家の衰乱を来すこともありましたが、そのたびに、志士仁人が尊王思想を鼓吹して王事に奔走し、その努力は終に明治維新の大業となつて実を結んだのでした。ところが先の

敗戦以来、我が国は、アメリカによつて国民主権や武装放棄を謳う憲法を押し付けられ、その結果、天皇と国民の間における君臣の名分は捨て置かれて来ました。また軍事的自立の喪失は、小国特有の事大主義を惹起し、我が国政府は外交的のみならず思想的な対米従属に陥つております。というのも、日米間の

安保条約と地位協定によつて、いまま全国に治外法権を有する五万人近い米兵が蟠踞し、畏くも皇居上空の制空権は横田に指令基地を置く米軍に掌握されております。こうした軍事的プレゼンスを背景に、アメリカは我が国に政治的自由主義としてのデモクラシーのみならず、近年では経済的自由主義としての市場主義を扶植し、国内の買弁勢力と結託して我が国における国民財産、民族資本の剽窃を企んでいるのです。

敗戦以来、我が国は、アメリカによつて国民主権や武装放棄を謳う憲法を押し付けられ、その結果、天皇と国民の間における君臣の名分は捨て置かれて来ました。また軍事的自立の喪失は、小国特有の事大主義を惹起し、我が国政府は外交的のみならず思想的な対米従属に陥つております。というのも、日米間の

そこで小生は、この国家の衰運を挽回する思想的糸口を上述した君臣内外の分別を高唱する崎門学に求め、兄と慕う月刊日本の坪内隆彦氏と共に闇斎の高弟である浅見綱斎の『靖献遺言』を読了し、更にはその感動の昂揚を禁ずること能わず、今日における崎門正統の近藤啓吾先生に師事してその薫陶を得たのであります。最近では同じく崎門学の重要文献である栗林潜鋒の『保建大記』を有志と輪読しております。

これまでそれらの研究成果は各種団体の業界紙や崎門学研究会のサイトで発表いたして参りましたが、この度、それに加えて会報を発行し、同志の方々の御高覧を賜りたく存じ上げます。つきましては、甚だ迷惑とは存じますが、何卒以上の趣旨を御諒察頂き、当会の活動にご指導とご鞭撻を賜ります様、関係各位には謹んで宜しくお願い申し上げます。

崎門学研究会代表 折本龍則

目下の安倍政権は、シナや朝鮮に対する旧来の軟弱外交を改め、我が国の領土主権の護持を唱えておりますが、主権は既に朝廷の元を離れ、中朝を防圧するために「日米同盟」を強化すればするほど、かえつて一層の対米従属を招き、それによる国威の失墜が中朝の我が国に対する侮りと侵略を助長するというパラドックスに陥つております。また安倍政権は、米製の市場主義イデオロギーに加担し、TPPへの参加や移民の受け入れを含む労働規制の緩和などの自由化路線を推し進めておりますが、これは市場における我が国の政策

# 学報創刊記念講演会

講師 坪内隆彦氏

『月刊日本』編集長・当会顧問

過ぎたる平成二十六年八月十日、本崎門学報の発刊を記念すべく、『月刊日本』編集長で当会顧問の坪内隆彦氏に千葉県浦安市内で講演を頂いた。以下はその要旨。

## 御講演要旨

演題 『新自由主義の脅威』

保守論壇の大勢は安倍政権支持であり、彼の新自由主義路線に対する批判は少ない。対して『月刊日本』は一貫して新自由主義を批判している。ここで言う新自由主義、ネオリベリズムとは市場万能主義、つまり政府の管轄を極力市場に委ねる考え方であり、シカ



講演の様子

ゴ大学のミルトン・フリードマン教授らによつて提唱された。1980年代初頭に、レーガンやサッチャー政権が政策的に導入したことで世界中に拡散した。

IMFや世界銀行が債務危機に陥つた発展途上国に対して、融資の条件に課した構造改革、即ち緊縮財政と公的セクターの民営化、規制緩和の形で実行され、それらの政策決定は主に上述したIMFや世銀の本部があるワシントンで米政府の意向を反映しながら下されたため「ワシントン・コンセンサス」とも称された。これらの新自由主義政策を強いられたボリビアやベネズエラと云つた中南米諸国では、貧富の格差が拡大し、米国と結託した政府に対する反乱が起り、反米政権が誕生した。例えばボリビアでは政府が水道事業を民営化し、外資が同事業に参入した結果水道代が高騰し、雨水の利用も制限されていたため、反政府運動が起り、それは死者の

発生を伴う大暴動にまで発展した。その後、政権は崩壊し外資は撤退している。これは「ボリビアの水戦争」として知られる。

新自由主義の本国であるアメリカでは、あらゆる公的サービスが民営化されている。それが極まった社会がいかなるものかは、三橋貴明氏が監修した『顔の見えない独

裁者』で描かれている。そこでは膨大な医療費のために、保険の未加入者は救急車すら呼べず、災害発生時は人命救助が営業の採算性によつて決まる。健康や安全など生命に直接関わる公共サービスまでもが、市場の原理で動かされるようになるということだ。

問題なのは、かくのごとき性格を有する新自由主義的政策を我が国に導入した場合、それが我が国の国体と矛盾することにある。周知の様に、我が国の国体は一君万民であり、仁徳天皇が民の寵を氣遣つたように、君主たる天皇が国民を大御宝として大事にし給うその大御心は、明治四十三年に天皇が「施療再生の勅語」として時の桂太郎首相に下された勅語にも明らかである。そして万民を撫育し給うその大御業は、少数に富が偏重し、大多数が困窮を強いられる新自由主義とは相容れないのである。

さらに新自由主義による公的サービスの民営化や規制緩和は、市場における新たな利権を生み出す。その利権を追求する者を「レントシーカー」と呼ぶが、アメリカではこのレントシーカーが企業連合を形成して自国ないしは外国の政府と癒着し、更には「リボルビング・ドア（回転扉）」と呼ばれる官民の人材交流を通じて、政府の政策決定にまで強い影響を与えているのである。

目下安倍政権が推進しているTPP（環太平洋経済連携協定）は21の分野における市場の自由化を含むが、これもレントシーカーで

あるアメリカの企業連合がオバマ政権を使嚙したものに他ならない。そして、かくして生じた米国からの外圧に内応する日本側のレントシーカーの筆頭と目されるのが竹中平蔵である。竹中は表向き慶大教授の肩書を使用しているが、その一方では人材派遣会社であるパソナグループの会長を務め、新自由主義による労働市場の自由化から利益を得ている。

パソナと政権の癒着が一般に膾炙したのは、昨今のASKAの麻薬事件が発端である。というのも、この事件でASKAと共に逮捕された棚内香澄美容疑者はパソナの社員であり、ASKAとは元麻布にあるパソナの接待施設で知り合ったとされるからである。仁風林と呼ばれるこの接待施設には、政官の要人が出入りし、その中の一人である田村厚労相（当時）は、同施設で接待を受けた直後に、労働政策の大転換を打ち出し、結果的に労働移動を円滑化する事業への予算が2億から300億に増額された。

周知のように、竹中は、かつて小泉政権の閣僚として自由化政策を推し進め、民主党政権では息を潜めていたが、安倍政権の誕生によつてゾンビの様に蘇った。現在では、産業界競争力会議や国家戦略特区諮問会議で民間の議員を務め、安倍政権の政策決定に影響を与えている。また彼は万年野党と称する団体を作り、政府の政策を監視し、政治家を格付けするなどしているが、警戒が必要だ。（以上）



## 谷泰山『保建大記打聞』

### を読む① 折本龍則

#### 『保建大記打聞』を読む

平成26年2月4日より、有志で『保建大記打聞』の輪読会を始めました。『保建大記』以下『大記』と略す）は崎門学徒である栗山潜鋒（1671～1706）の著作であり、『打聞』とは、同じく崎門の谷泰山が『保建大記』を注釈した講義の筆録です。『大記』は、元禄二年（1689年）の発刊、我が国における保元、平治の乱以降の歴史を説き、その紆余曲折のうちに不変の人倫を見ることによって、武家台頭による皇威失墜の原因を洞察いたしております。また、それは取りも直さず、徳川政治に対する根源的な批判と、いつの日か訪れるであろう皇威回復への庶幾に発するものでありました。崎門学では、この『保建大記』を重要な文献に位置付け、若林強斎先生も、同著を崎門学を学ぶ上で、北畠親房の『神皇正統記』に比肩しうる必読文献であると述べておられます。ちなみに本輪読会テキストのテキストとしては『保建大記打聞編注』（杉崎仁編注、平成21年、勉強出版）を採用することになりました。以下では輪読会の報告を兼ねて本書を読み進めて参ろうと思いますが、その前に、まず『保建大記』とその著者である栗山潜鋒について今一度説明をしておきましょう。

#### 『保建大記』と栗山潜鋒

『保建大記』の著者である栗山潜鋒は元の名を長沢成信といいます。長沢氏の先祖は上野に発し、その後丹波に移ったとされますが、父の良節は淀の城主石川氏に仕えて儒を講じていました。潜鋒14歳のとき京都に上って桑名松雲に弟子入りし、以後十年に亘って師事しましたが、その際、潜鋒と松雲を引き合わせたのは父良節と親しかった鶴飼鍊斎とされています。鍊斎は松雲とともに山崎闇斎の弟子でありましたから、良節は鍊斎の勧めによつてその子を松雲に従学せしめたのです。かくして潜鋒は松雲を通じて山崎闇斎に始まる崎門・垂加の学を修めることになりました。

そんな折、転機が訪れます。当時、京都には御西天皇の第八皇子である八條宮尚仁親王がまし、幼くして学を好み英邁を予感させましたが、当時14歳でこの尚仁親王と同年齢であった潜鋒は、鍊斎の推薦によつて親王に近侍することになったのです。恐らくはご学友の意味を以つての近侍であつたのでしょう。またこのとき、師の桑名松雲も親王の顧問に備わり、潜鋒や雲松の存在を通じて闇斎門下の俊秀が親王の下に参集しました。

かくして潜鋒が18歳のときに、著述して尚仁親王に献じ奉った書が『保建大記』であります。ときに元禄元年（1688年）のこと

でありました。この『保建大記』は後年の改定による書名であり、当初は『保平綱史』と題しました。題名の「保建」は保元と建久であり、本書の内容は潜鋒の厳格な史的考証と簡潔な筆致によつて、大体保元から建久に至る三十八年の間における朝廷の衰微と武家の台頭の次第が記されております。大体といったのは、厳密には本書の記述が保元元年の前年である久寿二年に始まっているからです。この久寿二年は後白河天皇が御踐祚遊ばされた年であり、本書の記述は建久三年、天皇の崩御を以つて終わっております。

このように、表題としては通常「保平」でも良さそうなのですが、敢えて「保建」に改題したのは、潜鋒が歴史の根本に道徳を仰ぎ見ており、当時に至る武家の専横が朝廷内部における道徳的墮落、なかんづく後白河天皇の失徳に多く起因することを重く見ているからであります。またかくの如くでありますから、本書の内容は朝廷衰微の道徳的動因の解明に主眼が置かれ、国家禍乱の俑を作つた暗君乱臣賊子には仮借ない筆誅が加えられております。

この直言不諱の態度については、仮初にも皇室に対する不遜不穩として憚る向きもありそうですが、平泉澄先生は「第一に事実を直視して真相を把握しようとする学者の良心から出た事である上に、第二には諷諫をたてまつつて帝徳を輔翼し奉らうとする忠誠の至情より発する所である事を知らなければなら

ぬ」と述べておられます（『保建大記と神皇正統記』）。

崎門学によつて君徳を涵養せられ前途を嘱望せられた尚仁親王でありましたが、潜鋒が『保建大記』を捧呈した翌年の元禄二年、俄に薨去し給いました。御歳僅かに十九の若さでした。その後、潜鋒は京都柳馬場に隠遁して悲嘆の内に学問を続けましたが、やがて元禄六年、二十三歳のときに、またしても前述した鶴飼鍊斎の推薦によつて水戸光圀に禄仕することを得ました。元禄十年には若千二十七歳にして水戸彰考館の総裁に就任しています。かくして彼の余生は大日本史の編纂に捧げられ、水戸学中興に与つて力がありましたが、後病を得て寛永三年四月七日長逝し、駒込の龍光寺に葬られました。享年三十六歳。『保建大記』の原文は高度な漢文で書かれていたため、そのままでは読むのが困難ですが、幸いにも前述した谷泰山による講義の『打聞』によつて現代の我々はその内容を理解することが出来るのです。ここにいう谷泰山とは如何なる人物でありましょうか。『秦山集』に収録された漢文の小伝を以下に読み下します。

#### 谷泰山小伝

先生名は重遠、字して丹三郎と称す。谷氏秦山は其の号。土佐長岡郡豊岡村の人。其の始祖を左近と曰ふ。長宗我部氏に仕へ顕名有り。左近五世の孫重元三子を生む。伯を重正と曰（三面続き）ひ仲を重次と曰ふ。季は即

ち先生なり。先生寛文三年癸卯三月十一日  
を以て生まる。性学を好み強記絶倫幼にし  
て小学四書舅島崎氏に受く。眼を過れば忘れ  
ず。又常通寺に入り守信法印を師とし法華經  
を読む。未だ両月に満たず誦を成し延宝七年  
六月年甫て十七上京して浅見けい齋に謁し十  
月山崎闇齋藤に謁す。二儒の学洛中を主とし

大義名分を説くこと極めて厳正と称す。先生  
既に二儒之教えを受け帰る。後屢々書を修め  
て益を請う。間断有ること無し。国守山内豊  
房公其の篤学を嘉し賜ふに廩俸を以てせんと  
す欲するも辞して拝せず。天和三年先生謂ら  
く読書勤業は郊居に如かずと。移つて泰山に  
住し元禄元年父重元卒す。家貧にして葬する  
こと能わず。二兄職を奉じて外に在り先生代  
わつて几筵を奉ず。孝友の情想うべきなり。  
七年書を渋川春海に寄せて天文曆算を学ぶ。  
春海は闇齋の弟子にして夙に出藍の称有り。  
初め先生星曆を闇齋に問うも闇齋卒するに及  
び春海の門に遊ばんと欲す。府司允さず。故  
に書を寄せて之を学ぶなり。八年、新たに渾  
天儀を鑄す。衡機各三尺、尤も簡明と称す。  
十年夏春海曆術の印可を授く。十三年先生学  
術已に優れ門人又多し。而して益々之を研か  
んと欲し香美郡山田野に移る。十五年豊房公  
終に廩俸を賜ひ移つて城下に居らしむ。府員  
延聘して講を聴く者常に六十人に下らず。而  
して公私の応接日々に違あらず。先生其の志  
業の廃を廃すことを恐れ十六年請て山田野に  
復る。宝永元年東遊して春海を駿河台に訪ふ。

此の行や過る所の山川宿駅皆之を詠歌す。畿  
内の社寺遊観せざるなし。東遊紀行二巻を  
著す。三年、是の先先生国内を巡行し式内  
二十一社の湮没せるものを考定し案を具て之  
を上る。此に至つて命を受け案を齎して京師  
に至り諸を卜部兼敬卿に訂す。卿之を可とす。  
豊房公二十一社を造替せんと欲し有司に先生  
と之を議せしむ幾ばくも無くして公館を捨て  
議遂に罷む。四年命有り先生を禁錮す。其の  
罪名を審らかにせず。ひそかに謂ふ。當時幕

府林信篤に命じて聖廟を建て文学を興し絃歌  
の声所在に起る。而して儒臣学士大義名分を  
曲解し甚だしきは冠覆倒置の言を為して以つ  
て天朝を侮蔑するに至る。世人察せず以つて  
当然と為す。蓋し時勢爾かるなり。先生の学、  
已に闇齋綱齋の上に駕し其の大義名分を説く  
こと糸絛案れず。以つて一国人士の心を感孚  
するもの有り。当路の人蓋し之を説かず。公  
の館を捨つるを機とし之を排除するなり。先  
生既に禁錮せられ毫毛も怨尤の色無し。昼は  
則ち書を抄し文を改め夜は則ち天象を觀、星  
宿を認め十有二年一日の如し。享保三年六月  
晦以つて終る。年五十六。嗚呼先生既に時に  
遭わず。命又長からず。満腹の経綸施為する  
所無くして歿す。豈慨嘆に勝ゆべけんや。然  
りと雖も一国感孚の効、世を累いで益驗あり。  
遂に勤王の唱首を以つて大いに顕るに至る。  
蓋し先生の志業は當時に屈して後世に伸ぶ。  
偉なりと謂ふべし。著する所の書某某、皆子  
爵干城君の家に蔵む。子爵の泰山集を刻する

に当り豊多に囑して之を謄写し之を校正し且  
先生の小伝を為して其の後に繋げしむ。豊多  
不敏不文其の伝を為んこと素より其の人に非  
ず。然れども豊多子爵の眷顧を蒙ること此に  
三十余年義辞すべからざるもの有り。謹んで  
其の梗概を叙して上ると云ふ。

明治四十三年十二月十五日  
安房 松本豊多謹誌

## 平成26年9月活動報告

### 9月1日 栗山潜峰先生墓参

『保建大記』の著者である栗山潜峰先生の  
墓所がある駒込の龍光寺（臨済宗東福寺  
派）を訪ねた。境内で質素に佇む先生の  
墓石の左隣には、『大記』の序文を撰した  
三宅観瀾の墓石、そして右隣には鶴飼金  
平こと鶴飼鍊斎の墓石が並んでいた。鍊  
斎は山崎闇齋門下で、潜峰を八条宮尚仁  
親王に、そして親王薨去の後、水戸光  
圀に紹介した人物である。



### 9月2日

第二十回『保建  
大記打聞』輪読  
会開催

### 9月23日

第二十一回『保  
建大記打聞』輪  
読会開催

## 崎門列伝① 山崎闇齋

坪内隆彦

### 拘幽操 放伐思想の防波堤

崎門学の祖山崎闇齋は元和四（一六一九）  
年十二月九日、貧しい鍼医の子として京都に  
生まれた。十五歳にして臨済禅の名刹、京都  
の妙心寺に入つて僧になり、禅学の究明に専  
念した。十九歳になると土佐の汲江寺に入っ  
ている。ただ、孝の思いゆえに、出家入道に  
疑問を抱いていた闇齋は、土佐南学を確立し  
た谷時中やその門人たちと交わつて、朱子学  
を学び、仏教から儒教に帰することになる。

闇齋の生涯を理解する際、近藤啓吾先生の  
「道を求める人であり、道の実践者であった」  
という視点こそが最も重要だと考えられる。  
特に、孝子たるの念こそが闇齋の思想と行動  
の根本にあった。仏教から儒教へ、そして神  
道へという外面的な遍歴にのみ目を奪われて  
はならないということである。

闇齋は、当時の儒者が中国を尊び日本を卑  
しむことに抵抗し、わが国の国体の尊厳を力  
説いた。闇齋はあるとき門人たちに向かつて、  
「今もし中国が、孔子を大将とし孟子を副将  
として数万の騎馬を率いて日本に攻めて来た  
ならば、我々のように孔孟の道を学ぶものは



どうすればよいか」と質問した。門人たちは誰もこれに答えることができず、「私たちはどうしてよいか分かりません。先生のご意見を聞きたいものです」と言った。すると、闇斎は次のように語ったという。

「不幸にしてこのような厄災に遭ったならば、我々は身に鎧をつけ、手に武器を執って彼らと一戦し、孔子・孟子を擒にして国恩に報いるより外はない。これこそが孔孟の道である」

この言葉こそ、崎門学の核心である、君臣の大義と内外の別という両面に支えられたものだった。闇斎はまた、孔孟の道を学びつつも、国体に合致しない湯武放伐論を退けた。放伐思想に対する防波堤として闇斎が注目したのが、『拘幽操』である。武王の父、西伯昌（後の文王）は、紂王の暴虐を諫めたが、その怒りにあつて獄舎「羑里」に幽囚されてしまった。しかし、王を動かすことができなかった自らを責めるだけで、主君を恨もうとはしなかった。この文王の孤忠を、唐の文豪韓退之がうたったのが、以下に掲げる拘幽操（羑里操）である。拘とは獄中にあること、幽とは幽暗のこと、操は琴曲のための歌であることを示している。

目 宵宵たり。其れ凝り、其れ盲ひぬ。  
耳 肅肅たり。聴くに声を聞かず。  
朝 日出です。夜 月と星とを見ず。  
知ること有りや、知ること無しや。  
死せりと為んや、生けりと為んや。

嗚呼、臣が罪、誅に当たれり。天王は聖明なり。

「羑里」は都から遠く離れた場所にあつて、人も通はず、鳥の声さえ聞こえないような場所だった。

闇斎の高弟浅見綱斎の講義に従つて説明すると、「宵宵」とは、目がおちくぼんで見えない様子で、「其れ凝り」は、水が氷つたように凝り固まっている。獄中は月日の光もなく、菖蒲さえもわからないので、目の働きを失つてしまい、目が見えなくなつてしまった。「肅肅」とは、秋の気色のものさびしい様子。菖蒲さえ見ることができないが、せめて訪れる人の声くらいいそうなものだか、訪れる人もいない。朝の日の光も、夜の月、星の光も見えない。だから、意識的であろうと、無意識的であろうと、また死んでいるというのか、生きているというのか、全く言語に絶する惨憺たる困惑状態にある。それでもなお紂王が愛しくて、いても立つてもいられないという心情だ。これこそが真の忠である。

### 垂加神道を樹立

闇斎は、伊勢神道を引き継ぎ、さらに吉田神道など広範な神道思想を集大成して自ら垂加神道を樹立した。闇斎は、明暦元（一六五五）年に、「伊勢大神宮儀式」について、「少しも仏事を混えていない。なんと万代の龜鑑ではないか」と称えた。これに続けて闇斎は、「嗚呼、神は垂るるに祈祷を以て先と為し、冥は

加ふるに正直を以て本と為す」（別の訓みあり）と述べているが、これが「垂加」の二字の典拠である。

闇斎は、伊勢神道が重視してきた「心神」に注目した。「心神」は、自分の心に神の御霊が宿つておられるという意味である。闇斎は、わが心神が天神から与えられたものであるとともに、天神に連なるものであることを確信した。近藤啓吾先生は、闇斎が「心神」がわが内なる天神（天人一貫）であつて、祖神の霊と自己の霊とが、ひとつながりの生命の流れの中にある（祖孫一体）という信念を持つに至つたと説明している。

闇斎は、「心神」の具体的事実を大己貴命（大國主神）の説話に見出した。天孫降臨に先立ち、経津主神・武甕槌神の二神から国土の献上を勧められた大己貴命は、いったんはこれを断つたが、それが高皇産靈尊の意志だと知ると、直ちにこれを献じ、自らは端の八坂瓊を身につけて隠れられた。近藤先生が指摘する通り、闇斎は、大己貴命が高慢な態度を反省し、これを改めることができたのは、実際の自分の存在、つまり「心神」を発見したからだと理解したわけである。そして、あらゆる物をことごとく天孫に献上し、退居して天孫と国土との守護に任ぜられた大己貴命に、利害の念や功名の心がなく、ただ生死を越えて、所期の具現への祈願だけがあつたことに、闇斎は神道の根本義を見たのだ。

大己貴命の説話に「心神」の具体的事実を

見出す過程で、闇斎は『神代卷口訣』を著した忌部正通の神道説の影響も受けている。そして闇斎は、寛文十一（一六七二）年八月、吉川惟足から吉田神道の伝を受け、十一月には垂加霊社の霊号を受けた。さらに、霊社号を授けられた翌日、闇斎は『藤森弓兵政所記』を草している。「弓兵政所」とは、延暦十三（七九四）年に藤森神社が桓武天皇より授かった宝称である。『日本書紀』を編纂した舍人親王を奉祀する藤森神社に、闇斎が初めて詣でたのは明暦三（一六五七）年正月のことだった。このとき闇斎が知った伝の一つ「五文字の法」には、『倭姫命世記』の語「神垂祈祷・冥加正直」の八字を書ず、とあつた。闇斎は、藤森の伝承に「敬」の本義を発見したのである。闇斎が、この「つつしみ」の具現と考えたのが、舍人親王が『日本書紀』を編纂するに当り、古来の伝承をすべて集めてこれを紀し、敢て取捨を加えなかつた謙虚な姿勢である。闇斎は『藤森弓兵政所記』において、この「つつしみ」がわが国の歴史を貫いて秀麗の国がらを成し、それを以て開闢以来、神皇の正統が永く続いているのであり、これが天照大神の勅したまうところの本意だと説いた。

闇斎は、主に『日本書紀』『神代卷』については『神代記風葉集』を、「中臣祓」については『中臣祓風水草』を編纂したが、舍人親王の編纂態度と同様、広く先学の諸説を蒐集するという姿勢を貫いたのである。